森から樹が育ち そして

Imagin 21

「イマジン21」第9号／平成16年6月1日発行（年2回 春秋発行）

リレー連載 世界遺産 奈良文学散歩 ④

Essay 印刷文化逍遥 ⑨

ならのらくら旅 生駒山を望む

報告 デジタル放送のQ&A

訪問 地域とボランティア
- 奈良大学附属幼稚園ボランティアサークル「ユーカリ」
- 奈良女子大学わかたけ会
- 奈良大学ユニセフボランティアサークル

大和の伝統行事 興福寺「薪能」

付録 デジタルカメラで印刷できる画像データ

奈良のことを、少しでも多く知ってもらいたい…という想いから始めたイマジン21ですが、皆様のご協力によって、細々と年２回の発行を継続しています。読んでいただいている皆様に改めて心から御礼申し上げます。

特に、リレー連載は奈良にご興味のある方にはじっくり読んでいただくに値する玉稿だと、ご執筆いただいている諸先生には本当に感謝しております。

今回は、俳人芭蕉に造詣深い永井一彰先生にご執筆いただきました。芭蕉といえば、蕉風俳諧のひとつ、「不易流行」がありますが、「俳諧の特質は新しみにあり、その新しみを求めて変化を重ねてゆく「流行」性こそ「不易」の本質である。」とあります。

経済人の一人として、私の座右の銘にしております。

永井先生の解説から、私自身学ぶべき多くを感じとりました。

素人づくりの小冊子ですが、今後ともよろしくお願い申し上げます。

代表取締役社長　近東　宏光

Imagin21

わたしたちができる環境づくり

自然との共存を図りながら
限りある資源を大切に使い環境を守っていく―
私たちは時代に役立つ企業であり続けたいと考えます

JQA-EM2283
本社・本社工場

編集／制作／発行
共同精版印刷株式会社
本　　社：〒630-8013 奈良市三条大路２丁目２-６
TEL 0742-33-1221　FAX 0742-33-7035
大阪支社：〒542-0082 大阪市中央区島之内１丁目１２-３
TEL 06-6271-7951　FAX 06-6271-7954
東京支社：〒116-0014 東京都荒川区東日暮里５丁目６-４
TEL 03-3802-4741　FAX 03-3802-4740

本誌に対するご感想、ご要望などがございましたら、上記本社内「イマジン21」編集部までお寄せください。

世界遺産 奈良文学散歩

リレー連載

4 芭蕉と訪ねる世界遺産

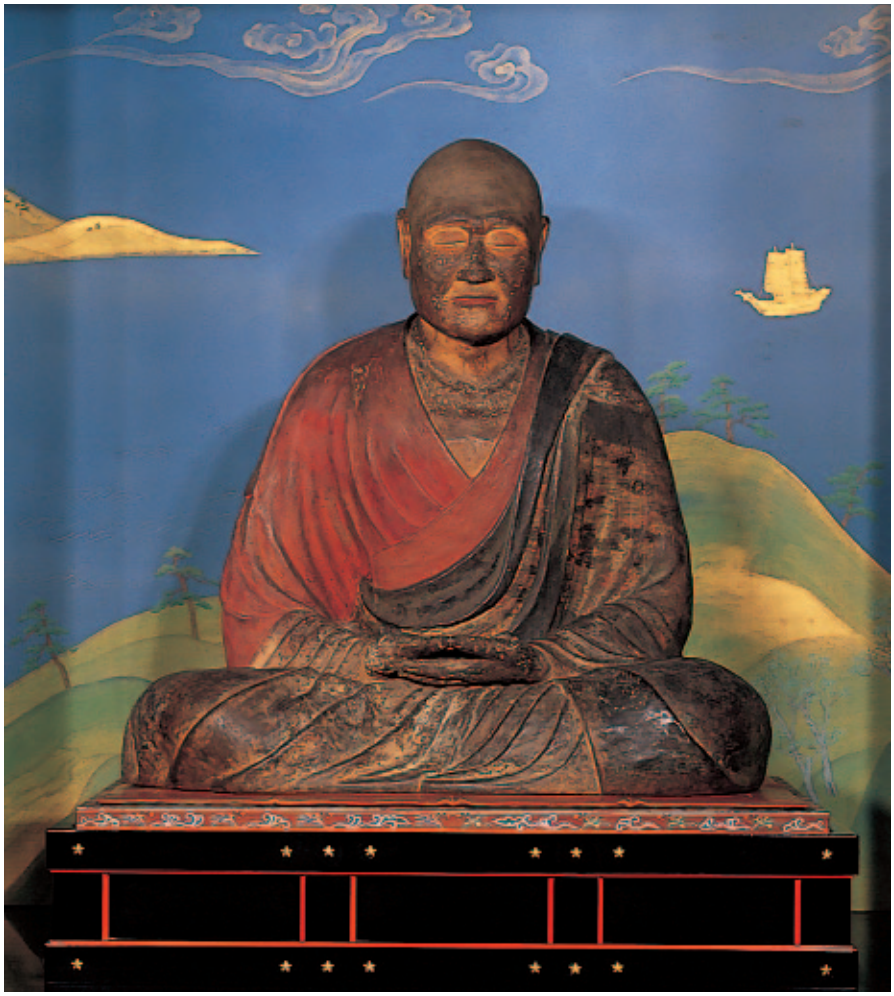


写真 鑑真和上像／唐招提寺（奈良時代・国宝）

芭蕉と奈良

旅の俳人として有名な芭蕉は、その生涯に於いて奈良へもたびたび足を運んでいる。

最初は、貞享元年八月から翌二年四月にかけての「野ざらし紀行」の折で、この時は旅の同行者であった千里の実家のある竹内村を初め、当麻寺・吉野山の西行庵及び後醍醐天皇御陵・東大寺二月堂などを訪問。次に、貞享四年十月から翌五年（元禄元年）四月にかけての「笈の小文」の旅では、長谷寺・三輪・多武峰・細峠・竜門・吉野・奈良・唐招提寺・在原寺・布留神社・八木・当麻寺などを回っている。この後も芭蕉は、元禄二年十一月末に伊賀から湖南・京都へ向かう途中に奈良へ立ち寄り、春日若宮御祭りを見物、元禄四年二月には伊賀から奈良へ赴き薪能を見ており、さらに元禄七年九月には芭蕉最後の旅となった難波行の途次に奈良で一夜を明かしている。

かように芭蕉と奈良は縁浅からざるものがあり、彼は奈良の地に多くの名吟を残すことになった。ここではその幾つかを紹介し、東大寺・唐招提寺・興福寺といった世界遺産の寺域を芭蕉と共に散歩してみることにしよう。

二月堂

お水取りの松明で有名な二月堂を仰いで立つと、階段の右側の木立の下に水取や籠りの僧の沓の音

と刻んだ芭蕉の句碑が建っている（右上写真参照）。後世の人が建てた芭蕉の句碑には、句形を誤るものが多いが、これもそのひとつで、天理図書館蔵の芭蕉自筆『野ざらし紀行』に

二月堂に籠りて

水とりや氷の僧の沓のおと

とあるのが正しい。先にも触れたように、貞享二年二月中旬にお水取りを見物した時の句である。誤伝を生んだ原因として、前書きに「籠りて」とあったこと、それに「氷の僧」と言ういかにもこなれない表現が使われていたことが考えられる。「氷の僧」とは「余寒の厳しいところから、深夜練行する僧を表現した」とする大谷篤蔵氏の説が妥当であろう。「沓のおと」は練行衆が内陣で履く差懸の音である。奈良はもともと寒いところ、その地の山際の堂内で余寒厳しい季節に行に励む僧侶の様子を詠んだ句である。なお、当時の歳時記によれば、願い事があれば一般の人でもお籠りが出来たようで、芭蕉もそういった人々に混じって、堂内に参籠してものと思われる。因みに、この時代、お水取りを詠んだ句はたいそう珍しい。

唐招提寺

貞享五年四月十一日、奈良を立った芭蕉はこのあと在原寺・布留神社へと向かうのだが、その途中に唐招提寺に立ち寄り鑑真和上像を拝んだものと思われる。その折の句文を紀行文『笈の小文』は、次のように伝える。

招提寺鑑真和尚来朝の時、船中七十余度の難をしのぎたまひ、御目のうち塩風吹入て、終に御目盲させ給ふ尊像を拝して、

若葉して御めの雫ぬぐはばや

衆知のごとく、鑑真は来日の志を立ててからさまざまの難に遭い、十一年後に来朝。その際、風浪・炎暑などのため失明したと伝えられ、その御姿の像が開山堂に安置されている（前頁写真参照）。「御めの雫」は盲目の尊像が涙しているように見えることを表す。「若葉して」には、「あたり一面に若葉が繁って」と言う解釈と、「若葉でもって」の意とする説があるが、ここでは後者を採りたい。折りしも美しく萌え出る柔らかな若葉でもって、涙しておられるかに見える盲た御目を拭って差し上げたい、というのが芭蕉の作意であろう。芭蕉には、自分とは辿る旅路は異なっても、同じように道を究めようとした先人への共感があったのかも知れない。

東大寺の大仏

元禄二年十一月の末、二ヶ月ほど故郷伊賀上野に滞在して「おくのほそ道」の旅の疲れを癒した芭蕉は、門人路通を伴い奈良に出て春日若宮御祭りを見物しているが、この折に東大寺の大仏も拝したらしく、次のような句を書き残している。

南都にまかりしに、大仏殿造栄のはるけき事をおもひて

初雪やいつ大仏の柱立

現代の私たちは大仏殿に納まった大仏しか想像できないが、芭蕉が拝んでいたのは露座つまり雨ざらしの大仏さ

写真 総務部：門口　誠一

までであった。歴史を辿ってみると、大仏殿は永禄十年の三好・松永勢の合戦で炎上し、芭蕉没後の宝永五年に再建されるまでの約百四十年間、大仏さまは露座のままであった。実際に柱立てが行われたのはやはり芭蕉没後の元禄十年のこと、芭蕉が訪れた元禄二年は前年にようやく釿始めがあったばかりの頃だったのである。釿始めはあったものの、大仏の修理も殿舎の再建も進められる気配もなく、御仏体には初雪がはらはらと散り掛かるが、柱立てが行われるのはいったいいつのことだろうと嘆いたのである。なおこの句、元禄三年正月十七日付の万菊丸宛芭蕉書簡には、「南都　雪悲しいつ大仏の瓦ふき」とあり、こちらが初案と思われる。「雪悲し」と言う表現からは芭蕉の嘆きの深さが窺われるが、その直情的表現を嫌って、後に「初雪や」と改めたのであろう。

奈良の鹿・重陽

その最晩年となった元禄七年の秋、故郷伊賀上野にあった芭蕉は門人支考と『続猿蓑』（出版は芭蕉没後の元禄十一年）の編集を終え、重陽の節句の前日に奈良へと向かい猿沢の池のほとりで一夜を明かす。その時の様子を、同行した門人支考は『笈日記』に次のように記している。

九月八日　難波津の旅行、この日に定まる事は、な良の旧都の重陽をかけんとなり。（略）さる沢のほとりに宿をさだむるに、はい入て宵のほどをまどろむ。（略）その夜はすぐれて月もあきらかに、鹿も声々にみだれてあはれなれば、月の三更なる比、かの池のほとりに吟行す。

びいと啼く尻声かなし夜の鹿　芭蕉

鹿の音の糸引きはえて月夜哉　支考

支考の伝えるところによれば、九月八日を奈良泊まりとしたのは、重陽の節句を奈良で迎えたいという芭蕉の意向があったものらしい。その夜は月も明るく、鹿の声に誘われて猿沢の池のほとりに出て真夜中頃に詠まれた句である。「尻声」とは、長く後に引く声のこと。支考の句の「糸ひきはえて」も同じ内容の表現。『古今集』に「奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿のこゑきく時ぞ秋はかなしき」と歌われているように、恋のシーズンを迎え妻恋いをする鹿の声は、古来哀切極まりないものとされている。芭蕉の句もその伝統に則ったもので、びいとあとを長く引いて鳴く鹿の声が今宵はとりわけ哀切に聞こえることだ、というのがその意味である。なお、『笈日記』には去来・正秀らの門人たちも、この芭蕉の句にいたく感動したことを併せて記している。

さて、翌九日、念願の奈良での重陽を迎えた芭蕉は次のような句を残した。

菊の香やならには古き仏達

しっとりと落ち着いたたずまいの奈良の菊の節句、寺々の仏様には菊の花が手向けられ、いかにも古き都にふさわしいことだ、といった意味合いである。

この句を詠んだあと、芭蕉は支考と共にくらがり峠を越えて大阪へと向かい、約一ヵ月後の十月十二日、枯野の遺吟を残してこの世を去り、二度と奈良の地へ足を踏み入れることは無かった。

くらがり峠にて

菊の香にくらがり登る節句かな

芭蕉は、この句を、峠のどのあたりで口ずさんだのであろうか。

また芭蕉は、奈良の御寺の甍が秋の陽射しに輝くのを、一度ならず振り返って眺めたであろうか。

永井　一彰［ながい　かずあき］

昭和二十四年岐阜県生まれ。
滋賀大学教育学部卒業。
大谷大学大学院博士課程単位修得満期退学。
現在、奈良大学文学部教授。総合研究所所長。
専門は、近世国文学（特に、俳諧・出版研究）。
『日本名句集成』（学燈社）『蕪村全集・連句編』（講談社）などに執筆。

印刷文化逍遥 9

嘉瀬井 整夫

Tadao Kasei

1934年京都市に生まれる。
1949年より同94年まで印刷産業に従事。
奈良県立短期大学（現奈良県立大学）卒業。
主著「井伏鱒二私論」「井伏鱒二とその時代」「奈良大和路文学散歩」ほか。
文芸評論家。

印刷文化は文化の裾野に連なる重要なものであるが、肝心の印刷産業の経営者じたいの関心が薄いことは残念なことである。

中には印刷文化に対する知識も広く、それこそ大学の教壇に立っても不思議ではない人もいるが、そういう人は稀で、大部分は通り一遍の知識しか持っていないといってよいであろう。

考えてみると、じぶんの職業の歴史や技術の研究について関心を持つことは、ごくあたり前のことであるが、逆にいうと、企業の利益をあげることに余りにも熱心なことから、ついつい原点を忘れることにつながっているのである。

今回は、お隣の国、つまり中国の印刷術についてのべてみようと思う。

いうまでもなく、わが国は中国から多大の恩恵を受けており、漢字はもちろんのこと、食文化をはじめ、色々なものがわが国に入ってきて、多くのものが生活の中に溶けこんでいる。

そうした中で、中国の印刷術が、わが国にどのような影響を及ぼしているのであろうか。これを知るには若干書物の世話にならざるをえないが、このほど街の古本屋さんで恰好のものをみつけたので、それを紹介しよう。

それは、平凡社という出版社の、東洋文庫というちの『中国の印刷術』1・2という二冊である。

以前（といってももう10年以上も昔のことになる）に1だけしか手に入らなかったのであるが、偶然にも二冊セットになっているのをみつけ、早速なが買い求めたのである。

だいたい本というものは、今すぐに役に立たなくても、買っておけばいつかは役に立つものである。それが証拠に今回のこのシリーズで取り上げることになったからだ。

ところで、この本の著者はT・F・カーターという人で、すでに故人になっている。

一九二五年に第一版が出版されたが、直後に亡くなっている。日本では大正の終りにあたる。

それで、この本の訳注には薮内清と石橋正子の二人があたっているが、薮内氏は明治39年生れ、石橋氏は昭和13年生れというふうに奥付には記載されている。

カーターの第一版は欧米で好評を博したらしいが、わが国では桑原武夫の父、桑原隲蔵氏がいち早くこの本を読んだと、訳者の序文でのべられている。

ただ、カーターがこの研究を行った当時は、まだ印刷術の研究の歴史が浅く、充分な内容とはいいがたいが、その特徴としては、世界史的規模における紙と印刷術の歴史を追求した点にあると指摘されている。

それでは紙の発明から入ろう。

紙の発明は一〇五年（後漢、元興元年）ということになっているが、しかし、この年次は随意に選ばれたので、あまり正確とはいえないのである。

つまり、一〇五年は蔡倫が紙の発明を皇帝に正式に上奏したことから、そうなっているが、詳細はわからないという。とはいえ、中国人の心の中では、蔡倫の名前と紙の発明とは、かたく結びついているのである。

その蔡倫が発明した紙とはどんな紙なのか。それは、古いぼろや魚網をくだいて、使ったといわれているが、今日の紙の常識からいうと、まだまだ「紙」というには程遠いものであっただろう。

五世紀の范曄『後漢書』宦官伝に見える紙の発明の記事には、つぎのようにのべられている。

むかしから文字は一般に竹や、その当時「紙」と称せられた絹ぎれに書かれた。しかし絹は高価で竹は重く、いずれも不便であった。そこで蔡倫は樹皮、麻、ぼろ、魚網を使うことを考えた。元興元年（一〇五）に彼は製紙術について皇帝に上奏し、その才能を高くほめられた。この時から紙は広く使われるようになり、「蔡侯紙」と呼ばれた。

紙が発明される以前は、絹や竹が使われていたのだが、絹は高くつき、実用向きではない。といって、竹（いわゆる竹簡というもので、いくつかを紐で編み、巻いて保管した）では重すぎたので、これまたあまり感心できなかったのである。

わが国では竹のかわりに木を用い、木簡として普及していたことが、平城宮跡からの出土によって証明されている。

近年では木簡関係の研究書も出て、木簡についての情報は豊かになっている。この木簡の種類も様々で、公文書にあたるものから、荷札にあたるものまで、範囲が広い。

さて、木版印刷が始まるまでは、いくつかの段階がある。

まず思い浮かぶのが摺拓である。つまり、われわれがふつう拓本というものである。その方法としては、つぎのような手順となる。

摺拓はいまでも中国ではきわめて簡単な方法で行われているが、それ

は疑いもなく最初から変わらないやり方である。一枚の薄くて腰の強い紙をあらかじめ水に湿らせて柔らかく粘着性を持たせてから碑面にはりつける。堅いブラシで石のくぼみや割れ目におし入れる。紙が乾くと直ぐに絹とか綿で作ったパッドを墨に浸し紙の上を軽く均等に打つ。最後に紙をはがすと、黒地に白く完全でしっかりした石碑の拓本ができる。

間違っても、碑面などにべったりと墨を塗ってはいけないのである。ところが拓本の取り方を知らない輩が、時として碑面に墨を塗ってしまい、取り返しのつかないことをしてしまっている。大和柳生の徳政地蔵の碑面など、ひどいことになってしまっている。

紙面の関係で、木版印刷に移ることにする。この本によると、中国の印刷術が誕生した唐朝（六一八～九〇六）は、中国の歴史においてもっとも栄光にみちた時代の一つであったという。

時代は降って馮道の出現である。彼は宰相として儒教経典の印刷を命じた。

もう一人、母昭裔の名を逸することはできないであろう。彼の忘れられないエピソードを紹介しておこう。

彼がまだ貧乏であったとき、友人から『文選』を借りようとしたが、友人は貸すことをいやがった。彼は、いつかじぶんが高官になったとき、木版でそれを印刷して、学者たちが入手できるようにしたいと決意した。

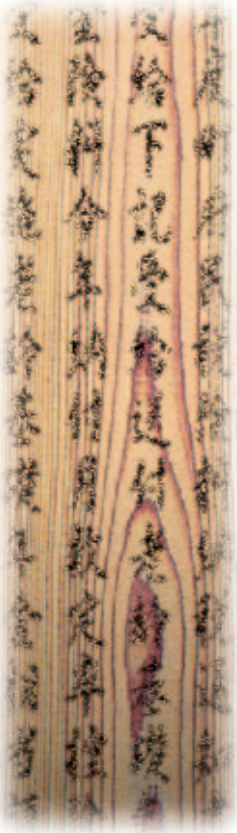
やがて王氏に仕えて蜀の大臣になった。今こそ『文選』を印刷するときだと思い、永年の願いを実現させた。書物の印刷はこのときに始まるといわれている。

友だちの本の貸し惜しみが、逆に本の印刷につながったのである。本の価値は、それほど貴重であったので、他人に貸すことは、はばかられたのである。

こうした儒教経典の出版による結果、大規模な印刷の時代が到来したことである。またすぐれた印刷技術について、つぎのようにのべられている。

宋代の木版印刷は、その質においてこれを凌駕するものがない。美しい筆蹟が完全に印刷に再現された芸術家肌の職人のすぐれた作品は、あらゆる時代の手本となっている。当時の愛書家が筆蹟を重視したことは、ほとんどすべての宋板の奥書に、原稿を書いた書家の名が著者や印刷者の名と並んで記されている事実に示される。宋代はまた印刷技術の改良の時代であり、そのもっとも注目される創意は活字の印刷であった。（後略）

印刷技術の要請や発展の裏には、宗教的な施設や信仰者の存在を抜きにして考えることはできないが、これはヨーロッパの僧院活動や、わが国の宗教活動の背景などをみても、共通する面があることは、いうまでもないことである。



第1巻の終章は「紙幣の印刷」にあてられている。これによると「中国でもっとも広く普及し、またあらゆる階層の人々の手にふれ、さらにマルコ・ポーロや、その他のヨーロッパ人旅行者たちの注意をひいた初期の印刷の形式は紙幣であった」というきわめて明晰なフレーズが展開されている。

つづいて「紙幣について論じた何人かの中国人著術家たちは、紙幣は硬貨以外の形式を代表する通貨から自然に発展したと考えている。彼らはしばしば「白鹿皮」〔皮幣〕について述べているが、これは西暦前一二〇年に漢の武帝がすべての貴族に強制して買わせ、貢物として献上させたものである（『史記』巻三〇）。しかし楊聯陞博士が指摘するように、鹿皮は流通を目的としたものではなく、当然貨幣とはいえない。」とものべられているが、おもしろい貨幣論としても受けとれるのである。編中、もっともすぐれた論述の個所であるかもしれない。

行きがかり上、もうすこし付き合ってもらおう。「紙幣のさらにいっそう近い起源は九世紀の初年にはじまり、進奏院と呼ばれる政府の役所に現金を預けた商人に「飛銭」すなわち手形が与えられた。この手形は商人の指定する場所での換金が保証されたが、それが紙製かどうかはわからない。（後略）」

わが国の紙幣については、紙質の立派なことや、印刷に至っては贋札製造を防ぐため、高度な印刷術が使われているが、ここにある「飛銭」などは、わが国の藩札にも及ばないものであったことは容易に想像できるであろう。

以上、中国の印刷術の一部にふれた。途中、大幅にカットして、印章、スタンプ、ローラー印刷、等省略したが、ここでは名称のみにしておく。

ともあれ、この書が中国人ではなく、英語圏の人によって書かれたというのもひとつの驚きである。また、『中国の科学と文明』を書いたニーダム博士が、カーターのこの書物をみずからの書物のモデルとして取上げようとしていたことも、当然なことであろう。

さらに、訳者序文でいわれているカーターの世界史的規模の広さである。それこそ織物のプリントの話があるかと思えば、カルタの印刷に一章が当てられていたりして、そのスケールの大きさを物語っている。

わたしをこのような印刷文化に向かわしめたのは、もちろん長い間印刷産業に奉職してきたこともあるが、もうひとつは、書誌学者で印刷文化にくわしい庄司浅水氏との出会いであった。

次回は、このつづきが書けたらと思っている。

ぶら

実はよく知らない地元の姿を再発見する旅。
今回は奈良県西北にある都市、生駒を歩きます。

遊仏 生駒山

ふもとから山頂へとつなぐケーブルカー、開通は日本最古（大正七年）だそうです。
まずは生駒山中腹にある寶山寺へ。

ふもと〜寶山寺まで

寶山寺

ふもとから生駒山を望むと中腹に山の塊が。この山は般若窟と呼ばれており、寶山寺の象徴となっています。
弊社も毎年お正月に参拝させていただいています。

般若窟

生駒山上遊園地（スカイランドいこま）

標高六四二mにある遊園地。たっぷり遊んだ後にみる大阪の夜景は絶景！
取材時は、冬季休業中でした…

住通 東生駒

トンネルを抜けると、そこは大阪。通勤通学に便利！あなたも一軒、いかがですか（笑）？

東生駒

Hi-OVIS（光ファイバーを利用した双方向の映像利用）発祥の地である東生駒。今やメジャーなケーブルテレビの中心地です。
住宅地のほとんどから生駒山が望めます。

往駒神社

生駒山を神体山とした日本で最古の形態の神社です。十月に行われる火祭は迫力あり！

温泉

さつき台福祉センターにある温泉給湯所。車にタンクを積んで給湯される方多数。どうされるのでしょう。

まるでG.S.

なのらりくらり旅 生駒山を望む

文科 高山

文化と科学、伝統と未来とが融合された町。様々な一面が垣間見えます。

高山竹林園

竹を中心に設計された日本庭園。美しさの中に安らぎが。年配の方々がお弁当をひろげておられました。

竹林園からみた生駒山

くろんど池

ハイキングやキャンプなど、自然を存分に感じられます。子どもの生駒メッカのひとつ。

茶筅（ちゃせん）

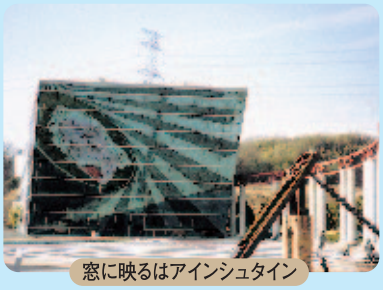
全国唯一の茶せんの里。もちろん、茶筅（ちゃせん）のみならず茶道具、編針なども生産されています。

ほとんどが家内工業による手作りだそうです。

奈良先端科学技術大学院大学・高山サイエンスプラザ

関西文化学術研究都市の拠点のひとつ。情報科学研究・バイオサイエンス・物質創成化学といった高度な基礎研究がなされています。

高山サイエンスプラザでは、物理学の基礎などを簡単に楽しみながら体験できます。デートでここを訪れる方も少なくないそうな。土・日は休館ですが。



窓に映るはアインシュタイン

境 南生駒

暗峠（くらがりとうげ）

生駒山標高四五〇m。奈良時代から大阪と奈良を繋ぐ街道として人々に利用されてきました。

現在も石畳や石仏が残り、ハイキングコースとして様々な人が行き来しています。

ここからは大阪

「生駒はただの住宅地」と思われている方々も少なくなかったのでは。生駒には、文化的な根と未来に向けた根が様々なところに張られています。一度生駒界隈を探索してみてください。きっとその根に触れることができるでしょう。

（営業部　桝井　隆昭）

デジタル放送のQ&A

二〇〇三年にテレビ開局五〇周年を迎え、テレビ局はこの節目の年にテレビ新時代が訪れようとしています。それがデジタル放送なのです。

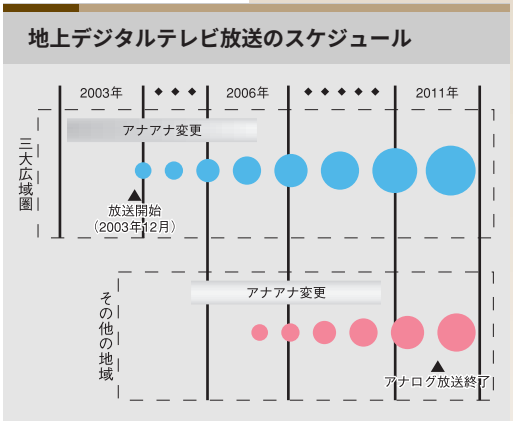
デジタル放送へ向けて、それに対応したテレビがここ数年普及しておりますが、デジタル放送とはいったいなんなのだろうか？という疑問をQ&A方式で探って行きたいと思います。

地上デジタル放送の概略

二〇〇三年末の東京・大阪・名古屋の三大都市圏における地上デジタルテレビ放送開始という国の方針に沿って、NHKでは二〇〇三年十二月一日から地上デジタルテレビ放送が開始されました。

地上デジタルテレビ放送では、BSデジタル放送で実現した高品質・高機能なサービスに加えて地域密着型のデータ放送や移動体での受信が可能になる等さまざまなサービスやメリットが展開されます！

- ハイビジョンの高画質とCDレベルの高音質
- 画面の番組案内から、関心のある番組を選ぶことが可能に
- 多様なデータ放送（全国向けと地域向け）
- クイズ番組への視聴者参加やドラマ・映画のリクエストなどの双方向機能
- 標準画質テレビ放送の多チャンネル化
- ゴースト障害のない受信
- 自動車やバス・電車などでの移動体や携帯端末に向けた動画サービス



Q1 デジタル放送を家庭で視聴するために必要なものは何でしょうか？

地上デジタルテレビ放送は、UHFの電波で放送されるので、UHFアンテナと今後発売される地上デジタル放送用テレビを設置すれば見ることができます。

BS・CSデジタル放送や地上デジタル放送を一つの機器で受信できるチューナーが発売されており、このデジタルチューナーを取り付ければ、現在ご利用のテレビでも地上デジタルテレビ放送は見ることができます。

また、マンションであれば、屋上等にUHFアンテナがあって、UHFの電波がそのまま家庭に流れていれば、現在のテレビにデジタルチューナーを取り付けることで見ることができます。

Q2 地上デジタルテレビ放送の電波の特徴は何でしょうか？

地上デジタルテレビ放送では、Eスポ障害といわれる外国電波による混信障害等のない美しい映像が楽しめます。このほか、データ放送等の高機能サービスや携帯端末等での受信が可能となります。また、アナログ放送は電波が弱くなるとそれに合わせて映りも悪くなるのですが、デジタル放送の場合は、電波が弱くなっても映りは悪くなりません。ただし、極端に電波が弱い場合、アナログ放送ではかろうじて映っていても、デジタル放送ではまったく映らないことがあります。

Q3 地上デジタルテレビ放送では三大都市圏の電波はどこから出るのでしょうか？

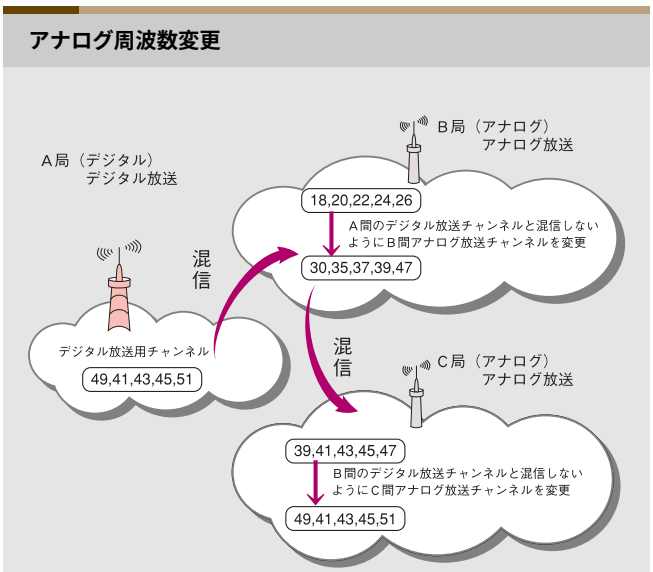
東京都市圏ではアナログ放送と同じ「東京タワー」からデジタル放送の電波が発射されます。大阪都市圏では、アナログ放送と同じ「生駒山」からデジタル放送の電波が発射されます。名古屋都市圏では、名古屋市にあるテレビ塔からアナログ電波が出ていますが、デジタル放送は瀬戸市に新たに建設される「瀬戸デジタルタワー」から電波が発射されます。

Q4 地上デジタルテレビ放送で使うチャンネルは何チャンネルでしょうか？

デジタル放送とアナログ放送が共存する期間は、UHFのチャンネルをアナログ放送とデジタル放送とで共有していきます。

将来的に、アナログ放送が終了した時にUHFの13～52（もしくは54）chを使って放送される予定です。

デジタル放送用のチャンネルを空けるため、アナログ放送が現在使っているチャンネルを変更することをアナアナ変更と言います。



Q5 なぜ地上放送がデジタル化されるのかでしょうか？

デジタル化は国策のもとで進められています。デジタル放送はアナログ放送に比べて優れた特性があります。日本を含めて十二カ国で地上デジタル放送が開始されています。

日本でも二一世紀を「ITの時代」と位置付けています。地上デジタル放送によって、全家庭のテレビが置き換わり、テレビがより身近で使いやすいIT端末となって、「IT社会のゲートウェイ」としての役割を果たすことが期待されています。デジタル化は電波の有効利用を可能にします。現在アナログ放送で使用している帯域を二分の三まで圧縮することができ、残りの帯域を通信や別の放送

サービスに利用することが可能になるのです。

Q6 デジタル放送とアナログ放送の原理の違いは何でしょうか？

原理的な違いは、アナログレコードとCDの違いと同様に、放送される信号が雑音に弱いアナログ信号なのか、雑音のほとんどないクリアなデジタル信号なのかという点です。

アナログは信号の大きさで、またデジタルは0と1の組み合わせで情報を表現します。アナログに比べ、デジタルは品質の保持、情報の圧縮や多重、検索が容易というメリットがあります。そのため、アナログより高品質な映像や音声、データ放送などのサービスが可能なのです。

Q7 インターネット等IT機器との接続は可能なのでしょうか？

地上デジタル放送の受信機は、イーサネットや電話線でインターネットに接続できるようになります。家庭から放送局への反応を迅速・大量に処理したり、放送を補完する追加的なコンテンツをインターネットで送り届けることができるようになります。また、メーカーによっては、インターネットのホームページを閲覧できる機能を持ったデジタルテレビも発表されています。

アナアナ変更（アナログ周波数変更）について

地上デジタルを放送するには、新たにデジタル放送用のチャンネルが必要です。地上デジタルテレビ放送が十分普及するまでは、現在の地上アナログ放送と並行して放送する必要があります。従って、周波数が混雑している地域などは、デジタルとアナログの電波が混信してしまいます。

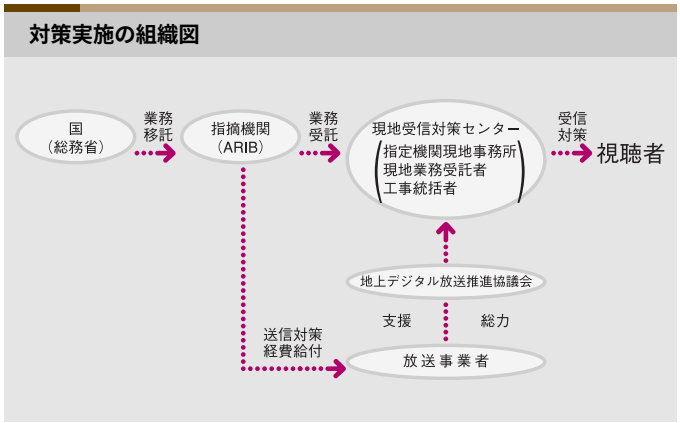
そのような地域では、混信が起きないように現在のアナログ放送チャンネルを別のアナログ放送チャンネルへ「引越しする」必要があります。この引越しに伴う対策が「アナログ周波数変更対策」（アナアナ変更対策）です。

Q8 アナアナ対策は誰がやるのでしょうか？

アナアナ対策は国が責任と権限をもって行なう事業です。

対策の事務全体は、総務省の指定機関ARIB（㈳電波産業会）が行ないます。地域での受信対策は、ARIBの現地事務所と現地業務受託者、それに工事を統括する工事統括者の三者からなる「現地受信対策センター」が実施します。

NHKや民放は、各地域の「地上デジタル放送推進協議会」（総合通信局、NHK、民放の三者を中心に構成）の一員として、「現地受信対策センター」に対し、支援・協力をします。



Q9 「受信対策」は誰が行なうのでしょうか？

「現地受信対策センター」が行ないます。

■大阪都市圏にお住まいの方

大阪・奈良地域受信対策センター	：0120―623―522
滋賀・京都地域受信対策センター	：0120―252―639
兵庫地域受信対策センター	：0120―540―700
和歌山地域受信対策センター	：0120―815―108
香川地域受信対策センター	：0120―112―064

■東京都市圏にお住まいの方

茨城地域受信対策センター	：0120―771―797
栃木地域受信対策センター	：0120―401―293
群馬地域受信対策センター	：0120―357―488
埼玉地域受信対策センター	：0120―401―035
千葉地域受信対策センター	：0120―401―398
東京・神奈川地域受信対策センター	：0120―401―350

Q10 各家庭ではどのような作業が行われるのでしょうか？

「現地対策センター」の作業担当者が、各家庭を訪問し、現在使用しているすべてのテレビ・ビデオのチャンネルプリセットの変更を行ないます。所要時間は約一時間半程度ということです。また変更したチャンネルの受信状況によりアンテナを交換する場合もあります。

Q11 「受信対策」にかかる経費は誰が負担するのでしょうか？

アナアナ変更対策にかかる経費は、基本的に国が負担します。

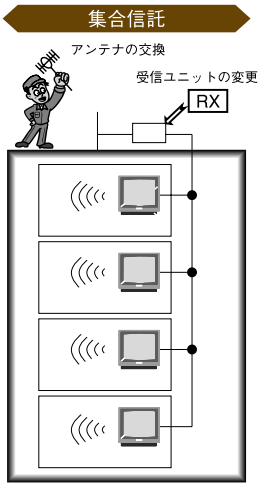
国が負担する対象は、一般住宅のほか、学校、病院、老人ホームなどの社会福祉施設が該当します。ホテルや事業所は、原則的に対象となりません。混信障害の場合は対象となります。

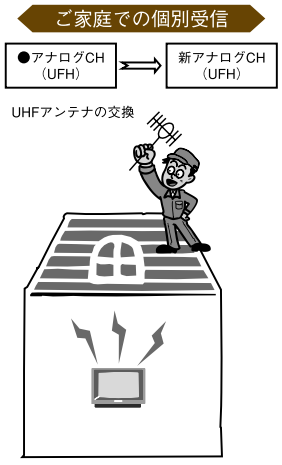
Q12 アナアナ変更を申し込まなかったり、知らなかったりするとどうなるのでしょうか？

アナアナ変更対策の申請をしないと国費による対策の対象とならず、視聴者が自らアナアナ変更対策をすることとなります。アナアナ変更対策をしておかないと、中継局のチャンネル変更後は、現在見ているテレビが見られなくなります。

デジタル放送は、国策のもとに行なわれており、私たち自身が放っておくとテレビが見られなくなるのです。ですから、案内などが来たら積極的にデジタル化へ向け対応し、美しい画像のデジタル放送を楽しみましょう。

※Q&AはNHKのHPより一部抜粋しました。





地域とボランティア

VOLUNTEER

今回は奈良県内大学のボランティアサークルを取材させていただきました。単に一言でボランティアといっても、様々な顔を持っています。大学生ならではの活動とは？また大学生にとってのボランティアとは？どういったものなのでしょうか…。

●奈良大学　奈良大学附属幼稚園ボランティアサークル「ユーカリ」
●奈良女子大学　わかたけ会
●奈良大学　ユニセフボランティアサークル

よりお話をお聞きしました。

■奈良大学　奈良大学附属幼稚園ボランティアサークル「ユーカリ」

平成十二年秋より活動が始まり、平成十五年五月に、サークルとして認定されました。

奈良大学附属幼稚園へ行って預かり保育の子供たちの遊び相手をしたり、運動会・学園祭などの行事のお手伝いが主な内容です。幼稚園の先生や職員の方、保護者の方に支えられながら、活動されています。

（預かり保育…保育時間後も延長してお子様を預けることができるシステム）

井坂至一さん（旧四回生）、木下佳也さん（旧四回生）、髙森美和さん（三回生）の三人にお話を伺いました。

Q 活動目的・目標を教えてください。

A 「サークルとしては大学と幼稚園をつなぐ窓口としての役割を担っています。でも目的も目標も個人それぞれによって違いますね。“教職をめざしている学生”や“ただ子どもを見ているだけで幸せだという学生”もいます。」

Q 「ユーカリ」という名前は変わっていますが特に由来とかあるのでしょうか？

A 「幼稚園では預かり保育のことをコアラと呼んでいるのですが、コアラのエサとなるユーカリの葉にちなみ、子どもたちの生きる糧となる力を培っていこうという意味を持ちます。夕方帰りの時間帯での活動で、縁（ゆかり）あって、などとも考えました（笑）。」

Q やっていて良かったと思ったエピソードなどあれば教えてください。

A 井坂さん「卒園する時に『お兄ちゃん、ありがとう』って言われた時とか…入園した時からずっと見てきた子どもが卒園するときは涙、涙でした。幼稚園の先生と同じ気持ちですね。小学生になってからも帰り道にふと会って、話し掛けてくれたりすると嬉しかったです。あとは子どもの成長を見る時とか…話し出したらあと二時間は話せますね（笑）。」

木下さん「私達の年齢になると初対面の人と気軽に話したりしないですけど、子ども達は無心で『遊ぼう！』って言ってくれることです。」

髙森さん「お絵描きの時間に私に内緒で似顔絵を描いてプレゼントしてくれたことですね。子どもなりにも自分たちを受け入れてくれているんだなぁと感じました。」

Q ずばり自分にとってのボランティアとは!?

A 井坂さん「居心地の良さです。今やっていることって奉仕活動ではなく、たぶん昔は当たり前のことだったと思うんです。金銭的な関わりなしに助け合う、人が暮らしていく中でのコミュニケーションというか…。奉仕の精神というよりも自分の居心地の良さを求めたらボランティアになったんです。」

木下さん「活動を続ければ続けるほど二倍にも三倍にも楽しさを覚えます。ただの奉仕ではなく充実感を味わえるものですね。」

髙森さん「人とのつながりです。人との交流を持ちたいと思ってボランティアを始めたのは中学生の時ですが、やっぱり人から学ぶことって多いです。それがたとえ子どもであっても…。今も交流を大切にして色々吸収していきたいですね。」

■奈良女子大学　わかたけ会

昭和五十五年に発足。京都府八幡市に住む軽度の障害を持った子供たちと月に一回遊んで交流を図るということが主な内容です。子どもとマンツーマンでペアを組むので保護者の方と活動計画を立てたり、子どもの体調を確認したり、と事前打ち合わせは入念にされます。お互いの信頼関係が成り立ってこそのボランティアということです。

大江美季さん（三回生）にお話を伺いました。

Q 具体的な活動内容を教えてください。

A 「夏はプール遊びをしたり秋はバーベキューをしたり季節に合った遊びを考えています。最近はお料理会でピザ作りをしました。」

Q 凝ったお料理を作られているのですね!?

A 「はい、簡単につくれるんですよ。子どもたちはこねたりする作業が好きなので、そういった点でもみんなで工夫しています。」

Q ボランティアを始めたきっかけは何ですか？

A 「阪神淡路大震災の時にボランティアのお兄さん・お姉さんに励まされたことが興味を持ったきっかけです。（大江さんは兵庫県北淡町出身）。あと私は教職を目指しているので…。他の学生も教職や福祉関係を目指している人は多いですね。」

Q やっていて良かったと思ったエピソードなどあれば教えてください。

A 「子どもたちに喜んでもらえた時です。しゃべられない子とかもいますが笑顔を見た時は嬉しいですね。」

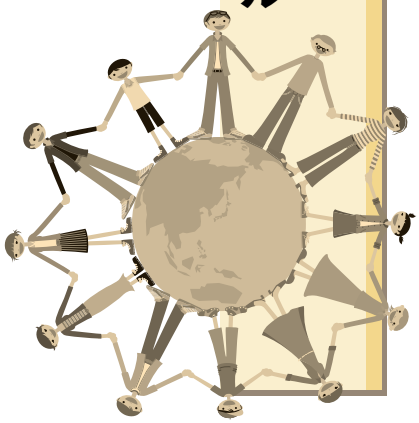
Q 今後の目標を教えてください。

A 「昨年より、また新しいことをやってみたいですね。もっと子どもたちに喜んでもらえたら…と思います。あとは部員みんなで仲良くやっていきたいですね。」

奈良女子大学わかたけ会のみなさん。
先輩後輩の力べがなく、とても仲良しなんです。

■奈良大学　ユニセフ ボランティアサークル

ユニセフ奈良県支部の協力要請を受けて活動されています。募金（最近ではイラン地震復興支援募金など）やユニセフ行事のお手伝い、絵ハガキやカード等の販売などが主な内容です。校外だけではなく昼休みや放課後を利用して校内でも活動されています。



多賀元起さん（三回生）にお話を伺いました。

Q ボランティアを始めたきっかけは何ですか？

A 「僕は中学生の時に障がい児保育のボランティアをやっていたから大学でも何かボランティアをしたいと思ったからです。他には子供の頃にボーイスカウトをやっていた人とか割と多いですね。」

Q 募金などに協力してくれる人って結構多いんですか？

A 「う～ん、年々減っているような気がします。どうしてもみなさん『身構え』されるようです。もっと気軽に援助していただけたらありがたいんですけどね。」

Q やっていて良かったと思ったエピソードなどあれば教えてください。

A 「なかなか思うようにはいかないけど自分たちのやっていることで少しでも喜んでもらえたら、と思うと嬉しいです。援助を通して色々な人に会えて、交流の輪が広がりますね。」

Q ずばり自分にとってのボランティアとは!?

A 「気軽が第一！だれでもできる時にやれるだけっていうのが僕の理想です。だれしも明るく笑ってやっていけたらいいですね。」

今回、色々な学生さんからボランティアへの魅力を語っていただきました。共通して感じたことは、奉仕活動をするというよりも自らを向上させるためでもあるのだということです。将来の夢への一歩であったり、色々な交流を通して視野を広げたり…。恥ずかしながら私もボランティアと聞くと身構えてしまう一人です。「奉仕」という言葉より「ただ子どもが好きだから」、「気軽に楽しくできればいい」という自然な心が大切なのだと教えられました。

取材・営業部　野村　早香

大和の伝統行事

興福寺「薪能」

高砂やこの浦舟に帆をあげて―（高砂）

人間五十年、下天の内に較ぶれば、夢幻の如くなり―（敦盛）

といった謡曲（謡）の一節はよく口ずさまれますが、「能を観たことは」と問われると、ノーと答える人が多いようです。

「能」は「猿楽能」を約めたもので、かつては猿楽と呼ばれてきたものです。そのルーツは、奈良時代に唐から伝えられた「散楽」といわれ、正倉院の「弾弓散楽図」にみられるように、奇術・曲芸・歌舞・音楽など雑多な内容であったようです。わが国古来の習俗と融合し、平安時代に笑いの芸能に中心が移るにつれて、「さるがく」と変化し、「猿楽・申楽」と書かれるようになったといいます。

さらに神仏習合の思想に伴って、寺社の法要・儀式と結びつき、「翁猿楽」や「呪師猿楽」と呼ばれるものとなりました。

現今私たちがみる能は、南北朝から室町時代はじめに、観阿弥（一三三三―八四）世阿弥（一三六三―一四四三）父子らが京都へ出て足利将軍義満の後援を得て、大和猿楽が都で流行したことによります。婆娑羅（派手な服装や勝手な振舞いをする）趣味の武将たちにもてはやされる中で、能作者たちは物語性のある能を新作し、優美・幽玄な芸術性を探求しました。

やがて、屋根のある専用能舞台、独特な面・豪奢な衣装が定型となり、演者も立ち方をつとめるシテ方・ワキ方・狂言方、はやし方は笛・小鼓・大鼓・太鼓と、七つの職分化が進み、互いの領分を越えないなどの垣ができ、それぞれの流派は家元をたて免許の制を設けた専門集団となりました。

夢幻能といった高度なものになり、みる側に知識が求められることにもなりました。大の能好きといわれた秀吉の能役者庇護は、江戸幕府にも受け継がれ、能は城中や武家屋敷の奥での芸能となりました。時に勧進能もあり観能の機会もありましたが、能本をなぞる「謡」や、シテの所作のみせどころを面や装束をつけず地謡だけで演ずる「仕舞」を除いては、一般大衆になじみのうすい芸能という経緯をたどりました。

それはさておき、猿楽能の母体が興福寺薪能であることは、ほとんど知られていません。大和の大寺で行われる修正会（正月）修二会（二月）の法要では、呪師という役の僧が、諸神を勧請する作法があります。この神事は兜をかぶり、剣や鈴を手に小きざみに会場内を走る仕草をするもので、お水取りで知られる東大寺二月堂の行法や薬師寺花会式の中でもみられます。興福寺の修二会は鎮守神である春日社にまたがる大がかりなものでした。

諸神を勧請するためのかがり火の薪を、西金堂は河上、東金堂は氷室の両社から迎えて、法呪師という役が四民安穏、厄難駆除の悪魔払いのため鬼やらいをし、東西両金堂の手水所の登廊でも行法の練行衆たちが薪を焚いて諸神を勧請したといいます。

こうした呪師作法に関連して、修法の意義を演技、演舞によって示すことを猿楽者にまかせるようになり、それらが芸能化し、それをもどく「呪師猿楽」とよばれる芸能として賞翫されるようになりました。

薪猿楽（薪能）は平安中期の万寿年間（一〇二四―二八）以前に始行され、猿楽者の活動もそのころからとみられていますが、史料上では『若宮神主中臣祐定日記』建長七（一二五五）年二月条にみえるのが初見とされます。

一方、保延二（一一三六）年に始まったという春日若宮祭は、「おんまつり」として今も親しまれていますが、その行列には舞楽・田楽・細男などとともに猿楽がみられ、児・翁面・三番猿楽・冠者・父尉を一組とする翁猿楽が演じられます。これを行った猿楽者は、円満井座の祖と考えられています。

鎌倉初期にはこの円満井座のほか、法隆寺属の坂戸座、長谷寺属の長谷猿楽の存在があったといわれ、また多武峯に参勤した山田猿楽（桜井市山田）も知られています。

世阿弥の『風姿花伝』には「大和国春日御神事相随申楽四座」として、外山座（宝生座）結崎座（観世座）坂戸座（金剛座）円満井座（金春座）の四座がみえ、室町初期にはこの四座が大和における代表的な猿楽座で、大和一国に強大な支配を誇った興福寺属となり、四座すべてが参勤したものです。

最も由緒が古いのは磯城郡田原本町西竹田附近を本拠とした円満井座で、「竹田の座」とも呼ばれて他の三座に対して本座と称されたといい、のちの金春座の名称は金春禅竹の祖父金春権守に由来するといわれます。

外山座は桜井市外山、結崎座は磯城郡川西町結崎、坂戸座は生駒郡平群町が本拠でした。坂戸座は興福寺属となったあとも法隆寺の祭礼に参勤、結崎座は多武峯にも参勤しました。

坂戸座は金剛権守から金剛座と称され、山田猿楽の山田みの大夫の孫三兄弟のうち、長兄の宝生大夫が外山座を継ぎ、結崎座を継いだ三男の観阿弥の芸名が観世であったことから、代々観世を襲名し、座名ともなりました。

薪猿楽（薪能）の大要を、金春禅竹（一四〇五―？）の『円満井座壁書』には

南都薪ノ神事猿楽、二月ノ行ナイ、西金堂ノ手水屋ノ薪ニ付タル御神事法会也。二月二日夜、西金堂ヨリ始ム。同三日夜東金堂。五日ハ春日四所ノ御神前ニテ、四ノ座ノ長式三番ヲ仕ル。同六日、衆徒ノ興行トシテ、南大門ニテ猿楽仕ル。ソレヨリ、時ノ寺務ノ一乗院、大乗院ニテ仕マツル。然レバ一七日ノ所作也。

とあります。この頃には修二会の法要とは切り離して行われていたようです。

まず①二月五日春日社神前での式三番が四座立合で行われ、これを「呪師

走り」と呼びました。②六日から七日間、四座立合で行われる南大門での猿楽能が最大の行事でした。また③八日からは春日若宮社頭で、金春・金剛・観世・宝生の順に一座ずつ、十二日には四座立合で演じ、これは「御社上りの能」と呼ばれました。④この間に二座が興福寺寺務を司る一乗院・大乗院へ参上して演能したといいます。

春日社神前の式三番が呪師走りと称されてきたのは、興福寺修二会の呪師走りのならわしをとどめているといえます。式三番は翁猿楽ともいわれ、老翁姿の神が現われて祝福を与えるという芸能で、父尉・翁・三番叟の三老翁が順に演じるものです。猿楽の座はこの翁猿楽を演じることを職能とし、しかも長と呼ばれる翁役専門の長老役者たちだけで翁を演じるのがならわしでした。そのため長たちは別火精進して身を清めたといいます。また父尉は仏、翁は文殊、三番は弥勒をかたどるという仏教的解説もなされます。

大和猿楽が徳川幕府のお抱えとなり、観世座が江戸へ移住して参勤が免除となり、残る三座も、寛文三（一六六三）年以降は二度交代で参勤しましたが、明治維新に薪能は廃絶となりました。

しかし昭和二十七（一九五二）年興福寺・奈良県・奈良市・薪能保存会によって「薪御能」として復活、平成二年（一九九〇）に奈良市無形民俗文化財に指定されました。現在は五月十一・十二日に行われ、十一日は春日大社で「呪師走りの儀」、十二日は春日若宮で「御社上りの儀」が午前十一時から、両日午後五時半から興福寺南大門跡の般若の芝で「南大門の儀」として能・仕舞・狂言が四座により演じられます（雨天の時は県文化会館で）。

昨今は各種のカルチャー講座で解説や観能がさかんとなり、各地で薪能と銘うつ野外能が行われます。しかし薪が単に照明あるいはムード盛り上げに用いられているにすぎません。

本来の薪能が神事として伝えられてきたこと、そして現代の能楽の母体が興福寺薪能にあることを、ぜひもう一度ふりかえりかみしめたいものです。

十六年度　薪御能番組

五月十一日

呪師走りの儀

金春流能　翁　金春　欣三

南大門の儀

金春流能　雲雀山　金春　安明
金剛流仕舞　加茂　松野　恭憲
観世流仕舞　鷺　塩谷　武治
金春流仕舞　天鼓　高橋　汎
大蔵流狂言　土筆　茂山千五郎
宝生流能　鵜飼　辰巳満次郎

五月十二日

御社上がりの儀

金春流能　経政　金春　穂高

南大門の儀

観世流能　忠度　観世　喜之
宝生流仕舞　八島　石黒　孝
金春流仕舞　東北　金春　康之
金春流仕舞　融　櫻間　右陣
大蔵流狂言　太刀奪　茂山忠三郎
金剛流能　船弁慶　金剛　永謹

薪御能について

「薪御能」は古都奈良の代表的な伝統行事であり、日本の古典芸能のもとになっているものでもあります。

お能のもとはお寺に所属していた猿楽（平安時代の芸能）で、今の能楽４座（観世・金春・宝生・金剛）はすべて奈良で誕生しました。

「薪能」のはじまりは平安時代（869年）興福寺修二会のとき、興福寺と春日大社で行なわれていた猿楽で、献上された神聖な薪の明かりのもとに演じられたことから「薪猿楽」と呼ばれるようになったといわれています。

鎌倉時代に猿楽が進化し、能となり、一般の人々も能を見るようになりました。

鎌倉・室町時代から興福寺修二会の「薪能」は格式の高い演能の場となり、芸の発祥の地であることを尊重して能４座の家元が出演をつづけてきました。

ところが鎌倉時代末期以後は戦乱のために興福寺の修二会の延期や中止がつづき、「薪能」も世の中の状況によって何度か中断され、明治以降はしばらく行なわれていませんでした。

昭和になって「薪能」を復活させようという意見が高まってきて、1937年に奈良県公会堂で行なわれ、1943年には再び興福寺南大門跡で「薪能」が行なわれました。

その後、世界大戦後の1946年に春日大社で呪師走りの儀・御社上りの儀（薪御能を興福寺で行なう前に神様の前で能を奉納する儀式）が復活され、1952年には能４座（観世・金春・宝生・金剛）が出演する興福寺南大門の儀が復活されました。

開催時期も以前は修二会のとき（３月）に行なわれていましたが、現在は５月11・12日に変更して行なわれています。

最近は全国各地で「薪能」と名付けた夜間の野外能が行なわれるようになったため、発祥の地　奈良興福寺では「薪御能」としています。

「薪御能」の特色は昔行なわれていた「舞台あらため」の再現と、能４座の家元等が出演でされることです。

現在「薪御能」は、春日大社・興福寺をはじめとした、地元の方々の協力や寄付で保存・開催されています。

※「薪御能」は平成２年４月、奈良市無形民俗文化財の指定を受けました。

薪御能保存会
Tel　0742―27―8866

写真：奈良市観光協会

命が吹き込まれる

紙ができ

KYODO SEIHAN PRINTING

KSP

R100 ●本誌は100%古紙配合の再生紙を使用しています。